



Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	湯浅, 万紀子; 成田, 佳子
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 29
Issue Date	2014-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56518
Type	book
File Information	MuseumNews_29_web.pdf



[Instructions for use](#)



あこがれの船を知る

CONTENTS

-
- 01 夏季企画展示
「学船 洋上のキャンパスおしよ丸」
-
- 02 秋季企画展示
「美術の北大」
-
- 03 企画展示 「三岸好太郎と札幌の山 一三岸好太郎作
《北海道風景(大通公園)》(筑波大学所蔵)をめぐって」
-
- 07 マレーシアでニワトリ飼育の始まりを目撃!?
〜クアラルンプール・マラヤ大学動物学博物館での調査から〜
-
- 10 2013年度後期 ミュージアムマイスター認定式
-
- 12 サイエンスパーク in 北海道大学総合博物館
-



おしよろ丸V世の進水式を映像取材する(三井造船株式会社 玉野事業所)

函館キャンパス水産科学館から始まった夏季企画展示

「学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」

- [水産科学館] 2014年5月20日～6月27日
- [総合博物館] 2014年7月11日～11月3日

4年に一度の冬季オリンピックやFIFAワールドカップブラジル大会など世界的なイベントが行われている2014年に、北海道大学でも、水産学部附属練習船おしよろ丸の世代交代という30年ぶりのイベントがありました。当館ではこの機を捉え、5月20日から夏季企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」を開催しています。

企画の経緯は3年前にさかのぼります。水産科学館への出張の際、車のなかから、白波が立つ函館港中央ふ頭に浮かぶ白い船が見えました。おしよろ丸の存在は知っていましたが、実際にその姿を見たのはこの時が初めてでした。船の近くへ移動し、乗り込んで良いのかと戸惑いながらタラップを上がると、突然訪れた



オープニング典儀の様子(水産科学館)

私たちを笑顔で迎えてくださった坂岡桂一郎首席一等航海士が、静かな船内を長い時間をかけて案内してくださいました。私たちには船での教育と研究、仕事すべてが新鮮に感じられましたが、この時は、後におしよろ丸の展示を企画することになるとは思ってもいませんでした。

その後、水産科学館の矢部衛館長と河合俊郎先生から、おしよろ丸で行われている本学らしいアクティブな教育や研究について更に詳しく聞き、その船の役割が2014年にIV世からV世へと引き継がれることを知らされました。そこで、おしよろ丸の歴史、教育や研究を広く伝える展示を、函館と札幌で開催することを決めました。企画展示を函館から巡回させるのは初めてのことですが、この展示は函館キャンパスにある水産科学館から始めることに意義がありました。

担当者はおしよろ丸の航海に実際に加わり、そこで行われている教育や研究、船での生活を映像で記録し、乗船者にインタビュー取材し、紹介することにしました。初めてのおしよろ丸との出会いから1年を経て、おしよろ丸IV世の北太平洋と北極海への60日北洋航海に2回、太平洋・父島周辺海域航海に1回参加し、

船員や研究者、学生に取材し、彼らのさまざまな活動を映像と写真に収めてきました。その様子は博物館ニュース28号でもお伝えしましたが、おしよろ丸での様々な活動を記録した映像や写真は、世界に1つしかない貴重な資料となりました。

多様で意義ある教育と研究とさまざまなチャレンジを展開してきたおしよろ丸の特色は、企画展示の運営にも引き継がれました。展示の名称は、教員・学生・おしよろ丸乗船者から募り決定しました。100名以上の応募の中から選ばれた「学船」は、学芸員養成科目の1つである博物館情報・メディア論を受講した高尾祐太さん(当時文学部3年)によるものです。また、企画展示のイベントとして「海・船」のイラストを広く学内外から募集し、7歳から40歳までの皆さまから22作品が寄せられました。開催前年度からの広報活動は当館の企画展示関連活動として初の試みとなりました。附属図書館で関連図書の展示が行われ、学内連携も強化されました。そして、「ミュージアムマイスターコース」の一環として、展示制作、会期中の展示解説、オープニングセレモニーや関連セミナーの運営など多くの場面で学生が活躍する教育を行い、関連書籍では学生によるエッセイなども紹介しています。

企画展示関連書籍
『学船 北海道大学
洋上のキャンパスおしよろ丸』

2014年7月11日発行
サイズ B5判
本文 96頁
定価 本体1,500円+税

札幌農学校初代教頭であったW.S.クラーク博士は、マサチューセッツに戻った後、世界一周して見聞を広めながら教育する「洋上大学」を企画したが実現しなかったと聞きます。時代時代の期待に応えながら、クラーク博士が理想とした「洋上教育」を実現してきたおしよろ丸。これからもおしよろ丸では、新しいストーリーが刻まれていくでしょう。

藤田良治
(研究部助教/博物館映像学)

湯浅万紀子
(研究部准教授/博物館教育学)

秋季企画展示

「美術の北大」

●2014年10月4日～11月30日

近藤七郎《タイトル不明(街並み)》
(キャンパス、油彩、58.7×90.5cm、農学部所蔵)中根孝治《第二農場》
(キャンパス、油彩、60×80cm、北海道大学大学文書館所蔵、星野精一寄贈資料)

文学研究科芸術学講座では10月4日(土)から11月30日(日)まで、企画展示「美術の北大」を開催します。平成23年度より芸術学講座・専修に所属する教員、院生が中心となって、北海道大学がこれまでに収集し、展示、保管している美術作品の悉皆調査を実施して来ましたが、本展はその成果の一端として、本学ゆかりの人物が制作した絵画作品を中心に、これまで余り知られることのなかった「北大における美術活動」に焦点を当てるものです。

本学の資産台帳には、絵画や彫刻、書など、美術品として登録されているものが300点以上あります。しかしそれらは本学の法人化に際して一括して登録されたもので、その作者について、また来歴や美術史的評価などについて詳細の不明なものがほとんどです。また資産

台帳に登録されていない作品が各研究室や部局等に埋もれている可能性もあります。それらを網羅的に調査し、「北海道大学所蔵美術作品」の存在を明らかにすることは、「北海道大学の文化的アイデンティティ」を確認することのみならず、北海道の美術活動の歴史や特質に新たな光を当て、芸術を通じて大学が地域社会に果たす役割について考察する機会となるものと思われまます。

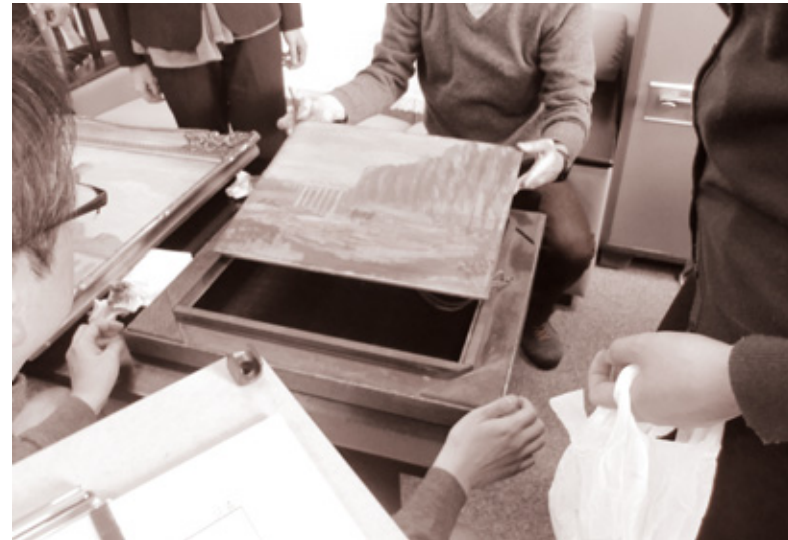
現在までのところ150点ほどの作品の現認調査を終えましたが、その結果、法人化以後の建物の改修、増築などに伴い、当初展示されていた場所から移動され所在が曖昧になった作品があること、倉庫や備品庫などに押し込められ、望ましい保存状態にはない作品があること、展示されていても、日光や照明、温湿度な

どの点で作品の保護に十分な注意が払われていないこと、常時掲示されながら、総長室や会議室など通常余り人の目には触れる機会がないこと、などの問題点が判明しました。本学に美術館相当施設がない以上、こうした問題が一挙に解決することは困難でしょうが、本学が所蔵している優れた美術資産の保存活用する方途を検討する一助にならうかとも思われます。

実際、調査の過程で、中央画壇や北海道画壇でも名を知られた画家たちのこれまで知られていなかった作品を発見したり、全く無名でありながら優れた作品を描いている作家を発見したりすることもできました。そのような作品、作家を一点ずつ、一人ずつ調査研究することには多くの困難を伴いますが、院生を中心にその成果を展覧会という形で実現し、図録を編集してそこに解説文や論文を執筆することは、芸術学や博物館学、ひいては人文科学の教育研究にとって大いに意義あることと考えられます。また講演会、市民セミナー、シンポジウムなど関連事業を通じて、調査研究成果を広く市民に還元するという大学の社会的責務を果たすことにもなるでしょう。

芸術の秋、どうぞ「美術の北大」展に足をお運びください。そして、そこに描かれたこの美しいキャンパスの価値を再確認していただければ幸いです。

北村清彦
(大学院文学研究科芸術学講座教授/美学・芸術解釈学)



作品調査の様子

2014年度「地質の日」記念企画展示

「地図が語る多様な世界 —地図の過去・現在・未来—

5月10日の「地質の日」を記念する今年で7回目の企画展示が、4月22日(火)から6月8日(日)まで総合博物館2階企画展示室で開催されました。

その始まりは文字よりも古いといわれ、私たちの生活で様々な利用されている地図について、江戸末期～開拓使時代の北海道におけるその歴史とともに、地形図の作成過程、いろいろな地図や最近の3次元地理情報の現状を紹介しました。明治～昭和初期に活躍した経緯儀などの測量機器の現物も展示しました。

主催は北大総合博物館と「地質の日」企画展示実行委員会、共催は日本地質学会北海道支部・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・北海道開拓記念館・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会・NPO法人Digital北海道研究会です。展示には北大附属図書館・国土地理院北海道地



古い測量機器や床に掛けられた北海道の立体地図は好評をいただいた

方測量部・一般財団法人宇宙システム開発利用推進機構・地図と鉱物の山の手博物館に多大なご協力をいただきました。

関連した市民セミナーとして、総合博物館1階「知の交流」コーナーにおいて、5月11日(日)に「最近の地図と地理情報システム(GIS)」(山岸宏光氏)、17日(土)に「地図と重力」(吉田賢司氏)、24日(土)に「ライマンはなぜ開拓峠で道に迷ったか—江戸末期～明治初期の地形図事情—」(地徳力氏)を開催し、18日(日)には植物園～清華亭(偕楽園跡)～北大構内を歩く市民地質巡検「札幌のメモを訪ねる」を30名の参加者で行いました。

在田一則
(資料部研究員/地質学)

筑波大学芸術系との共同企画展示

「三岸好太郎と札幌の山 —三岸好太郎作《北海道風景(大通公園)》(筑波大学所蔵)をめぐる—

●2014年9月6日～9月28日



三岸好太郎
《北海道風景(大通公園)》
1932年 油彩、画布
62.8×80.2cm
筑波大学・石井コレクション

18歳で上京した三岸好太郎(1903～1934)は、志を果たし画家として地歩を固めてからもたびたび札幌を訪れました。札幌は三岸にとって文字どおりの故郷であり、そこに帰るとかならず絵画芸術に向き合うための動機づけをあらたにできる場所でした。そのようななかで最も重要だったと思われるのは、1932年の夏から3ヶ月にわたる滞在でした。

筑波大学が所蔵する油彩画《北海道風景(大通公園)》は、その年の札幌逗留中に制作された一連の風景画のひとつと見なされます。明るい青緑色と褐色が広がる前景の向

うには背の高いポプラを思わせる樹形の木立が左右に控え、そのあいだから緑色深い山並みと遠方に重なるなだらかな連峰を望み、大地のすべてを覆うような動きのある雲が画面上半分に厳しい表情を与えています。速度感のある奔放なタッチで一気に呵成に仕上げられたであろうこの風景画には、広がりや奥行きをもった眺望にとらえた札幌の山に対する画家の感興が、じかに表現されています。

1932年9月の地元紙『北海タイムス』は、この絵が「大通公園」という題名で同年の道展に出品されていることを写真入りで紹介してい

ます。その後、65年には札幌拓銀南ビルでの回顧展に「北海道風景B」という題名で展示されたことが確認できます。そして今秋、北海道大学総合博物館と筑波大学芸術系による共同企画が、この絵にとつての五十余年ぶりの帰郷を叶えます。

この《北海道風景(大通公園)》は、前所蔵者から筑波大学に寄贈されたあとの調査で、カンヴァスを張った木枠に「北海道帝國大学構内 三岸好太郎」という書き込みが確認されました。その書き込みの真正性は適切に検証されねばなりません。三岸が連峰を望みイーゼルを立てたのは、はたして大通公園だったのか北大構内だったのかという好奇心を喚起し、その好奇心が今回の共同企画のきっかけとなりました。想定される場所で、想定される方向に向いて立ったとき、もしかすると三岸自身がこの絵に託した札幌と、札幌の山への想いを知ることができるかもしれません。

寺門臨太郎
(筑波大学芸術系准教授/美術史)



北大構内ポプラ並木の北から南西方向を望む(2012年7月3日撮影)

産学連携常設展示

「バイオミメティクス」



北海道大学では、世界水準の先端的・融合的研究と教育に基づいた産学連携を積極的に推進し、地域社会と産業界を世界に繋ぐ役割を果たすことを社会貢献の基本的目標としています。

新規常設展示

「カメレオン発光体・赤色強発光体」展示

紫外線をあてると発光する物質、「カメレオン発光体と赤色強発光体」の展示が完成し、1階「人間・社会・自然と科学技術」展示室で公開されました。

これら2種類の発光体は、大学院工学研究院の長谷川靖哉教授が開発した物質で、大学の研究成果を発信するとともに、化学が生み出す新物質の魅力や研究の面白さ、社会への貢献などを、物質が放つ光の美しさとともに感じてもらえる展示内容となっています。文学研究科の展示制作プロセス演習(担当教員:佐々木亨)の一環として企画・制作されました。また、北大の研究発信の一翼を担うという目的を持つことから、産学連携本部の協力によって制作が行われるという、当館で初めての試みに支援され実現したものです。

「カメレオン発光体」は、一つの物質でありながら温度によって緑、黄色、オレンジ、赤と様々な色を発するという、世界で初めて開発された物質であり、「赤色強発光体」は世界最高の発光強度と発光効率をもつという、どちらも世界最先端の研究成果であると言えます。その成果が学会やプレス発表を通じて発信されたり、オブジェとして公共空間に置かれたりすることはありましたが、恒常的に一般の方々に体験や学習をしていただける機会や場所はありませんでした。

当館では文部科学省の研究大学強化促進事業の一環として、産学連携にかかわる研究成果の展示コーナーを平成26年3月に開設しました。

初回の展示として下村政嗣名誉教授(現・千歳科学技術大学教授)、長谷山美紀教授(情報科学研究科)、居城邦治教授(電子科学研究所)、グン剣葦教授(理学研究院)、石田秀輝教授(東北大学名誉教授)にご協力をいただき、「バイオミメティクス研究」を展示しています。バイオミメティクス(Biomimetics 生物模倣技術)とは、生物のもつ能力や形・機能などの特性を把握し、そこからヒントを得て人工的に設計・合成・製造し、製品開発などに応用する技術です。近年、学際的に進められている先端研究であるとともに、企業の注目度もきわめて高い研究分野です。

レーザー照射によりマイクロレベルの蜂の巣

(ハニカム)構造が回折した光として投影される装置や、人工軟骨の素材に使われるゲルの実物、膨大な電子顕微鏡(SEM)画像の中から情報処理技術により類似した画像を自動的に選び提示し研究者に新しい研究の発想を想起させるシステムなどを展示・紹介しています。

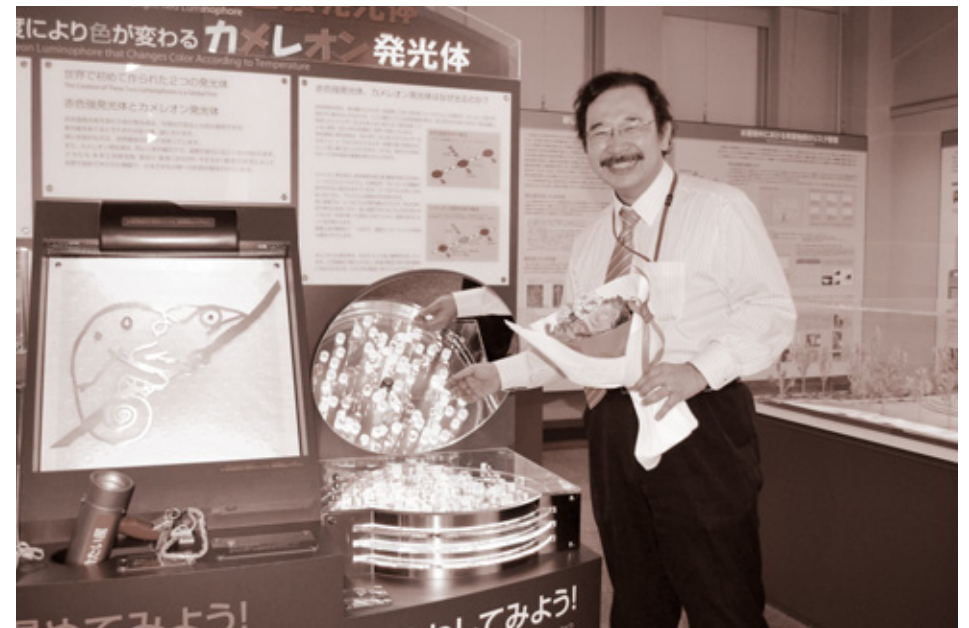
また当館では、博物館の収蔵する生物系自然史標本がバイオミメティクス研究のデザインや機能のアイデアをもたらす源泉となると考え、生物学者、工学者による標本利用の活性化も図っています。毎月第1土曜日にはバイオミメティクス・市民セミナーを「知の交流コーナー」で開催し、2014年6月で30回目となります。

今後も注目の産学連携研究を展示して紹介してゆく予定です。ご期待ください。

大原昌宏
(研究部教授/昆虫学)

の目的に応じて楽しめるよう工夫が凝らされています。どの博物館、科学館にもない世界で一つの展示を、ぜひ体験していただきたいと思っています。

古田ゆかり
(大学院文学研究科修士1年)



2種類の発光体を開発した長谷川靖哉教授

追加展示

「循環から見る自然と人—森・土・水—」
「北大の蔵書」



海の循環について
北海道に多く見られる
コンブを題材に解説

この春、文学研究科の展示制作プロセス演習(担当教員:佐々木亨)において、学生による2つの展示室の追加展示が完成しました。

本館1階「循環から見る自然と人—森・土・水—」展示室では、広大な演習林や、臨海・臨湖研究所を擁する北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの研究を基に、循環する環境について展示しています。これまでの森林・河川・農地からの視点に加え、今回、北海道の海岸部に多く産出するコンブに焦点をあてた海の循環の展示が加わりました(写真上)。また、演習林において設立当初から収集保管されてきた約100年前の種子標本や、箱メガネを覗きこんで海中の状態を確認できる装置、触って理解する循環環境の模型、圃場で品種改良した草丈4mのススキ標本、循環図なども追加し、見て触って体験する要素がさらに多くなりました。

本館2階「北大の蔵書」展示室では、開学以来、蓄積し続けている書籍の一部を紹介していますが、書籍の頁をタブレット型コンピュータで誰でも簡単に見ることができるよう追加しました(写真下)。開拓使時代のお雇い外国人の舶載洋書、札幌農学校文庫に所蔵されている感想や註の書き込みのある書籍、

1937(昭和12)年発行『北海道帝國大學新聞』「豫科・文化調査」の学生投票による当時人気のあった著者の書籍、大正～昭和初期の受講ノートなどを画面で拡大してご覧いただけます。ここで展示している書籍は蔵書のほんの一部ですが、当時の学びの様子が想像できる書籍の頁を通して、開学当時の時空を旅していただけたらと思います。

これらの展示室は、「循環から見る自然と人—森・土・水—」を平成23年度に、「北大の

蔵書」を平成24年度に、これまでも大学院生がリニューアル作業を行ってきました。今回の追加展示でさらにグレードアップした展示室にぜひ訪れて、北海道大学の知の蓄積と人々が創り出す未来を体感してください。

大内須美子
(大学院文学研究科修士2年)



展示関連書籍を拡大して見られる
タブレット型コンピュータ画面
写真の画面は「日東魚譜」

企画展示

「ツイン・タイム・トラベル
イザベラ・バードの旅の世界 写真展」報告

平成26年1月25日(土)から開催されていた企画展示「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 写真展」が5月11日(日)をもって終了しました。90日間の開催で、来場者数は23,709名に及びました。

「時をこえたふたつの旅(ツイン・タイム・トラベル)」が、本展示の趣旨です。英国人女性イザベラ・バードは、19世紀後半から20世紀前半にかけて、約40年間にわたり世界を旅し、多くの旅行記を著した旅行家です。1878年には日本を訪れ、その旅について記した「日本奥地紀行(Unbeaten track in Japan)」はイザベラ・バードの代表作でもあります。

バードの研究者であり、地理学者でもある金坂清則先生(京都大学名誉教授)は、バードの旅のルートを丹念に辿り、20年を掛けて、その全てを追体験しました。バードはスケッチと写真により記録を残しましたが、金坂先生はバードが立ち寄ったであろう現場で写真撮影をされています。バードと金坂先生の、時を超えたふたつの写真が並べられているのが本展



金坂清則先生によるギャラリーツアー



展示解説VTRの上映も行なわれた展示室の様子

示の構成です。金坂先生は、バードが訪ねた現場に立ち、その経験からバードの作品を翻訳します。旅行記の翻訳は、当時の現場の再記載を別の言語で科学的に行うことに他なりません。現場のフィールドワークから知り得た情報をもとに、時を超えた正確な再記載に努力を惜しまない金坂先生の姿勢は、来館者を魅了します。バードのスケッチと同じ風景の金坂先生の写真を見ることで、私たちがツイン・タイム・トラベルを体験できます。バードが立った現場にたどり着くまでの情報収集の苦労と過程を考えると、まさに本展示がバード研究、そし

て地理学研究のフィールドワークの成果そのものであることは論を俟ちません。

出品数254点の写真に、多くの来館者が釘付けになった展示会でした。本展示の監修をされた金坂清則先生、展示開催にあたりご尽力いただいた京都大学総合博物館の大野照文館長、永益英敏先生、東京大学駒場博物館の伊藤元巳館長、折茂克哉先生に厚くお礼申し上げます。

大原昌宏
(研究部教授/昆虫学)

「札幌農学校第2農場」公開休止のお知らせ

史跡「札幌農学校第2農場」は、クラーク博士の大農経営構想により、1877年に建築された模範家畜房(モデルバーン)や穀物庫(コーンバーン)を始めとするわが国最古の洋式農業建築群を揃え、ここから日本畑作・酪農の技術普及が進んだため、国の重要文化財、北海道産業遺産などに指定されています。

緑豊かな敷地に開拓時代を想起させる建物が点在する風景は、教職員、学生だけでなく市民の皆さまにも親しまれてきましたが、風雪に耐えた建物は建材の劣化が見られるようになり、倒壊の危険もあると判断されたため、耐震改修工事を行うこととなりました。工期は2015年5月末までを予定しています。また、敷地を閉鎖しておりますため建物外観や前庭も期間中はご見学いただけません。

ご迷惑お掛けいたしますが、ご理解ご協力をお願いいたします。



マレーシアでニワトリ飼育の始まりを目撃! ～クアラルンプール・マラヤ大学動物学博物館での調査から～



ケージの「前」にいたセキショクヤケイ(右)とニワトリの親子(左)

「友人が野生のセキショクヤケイを飼っているからみにいかないか?」マレーシアのマラヤ大学動物学博物館で同館の学芸員・ターリーさんに尋ねられた私は、「ぜひお願いします!」と即答しました。

卵に肉にと毎日の食卓でおなじみのニワトリ。セキショクヤケイはそのニワトリの祖先で、マレーシアやタイなど、東南アジアの森に住んでいます。セキショクヤケイはヒトのかかわりでいつ、どこで、どのようにニワトリになったのか? 現在の私の研究テーマの1つで、私の専門とする動物考古学一遺跡から出土した動物の骨から過去の人々の生活を復原する研究分野—でも旬なトピックの1つです。マラヤ大学動物学博物館では、この研究の一環として2014年3月にニワトリの骨格標本を調査しました。

博物館から車で20分ほど走ったところを目指すケージはありました。「あの中にあるよ」と教えてもらう前に、私の眼はケージの「前」にいた鳥に釘付けになりました。

「セキショクヤケイがいる!」

何と、セキショクヤケイを飼育しているケージの「中」ではなく「前」にセキショクヤケイがいたのです。驚いて訪ねる私にターリーさんは「あれは前に飼っていたヤツだ」とこともなさそうに教えてくれました。「3ヶ月ほど飼っていたけど、今のヤツを捕まえたから放したそう。人間はエサをくれて、怖くないことを知っているから、よくケージの周りに遊びにくるんだ」とのこと。

つまり、以前飼われたことがあるとはいえ、野生のセキショクヤケイ。野生のセキショクヤケイの写真を撮れる機会など、そうそうありません。私は、ケージや階段などの人工物を入れずに、できるだけ大きくこの鳥を撮ろうとカメラ片手に夢中で追いまわりました。ふと気づくと15分ほどが経過しており、ターリーさんとその友人(セキショクヤケイの飼い主。お名前は聞けませんでした。)は苦笑を浮かべて座り込んでいました。

ターリーさんの友人に「セキショクヤケイ

を飼っているのは食べるため?」と尋ねると、彼は笑って「ペットだ」と答えました。今ケージの中で飼っているセキショクヤケイもそのうち放して、次の鳥を捕まえてくるつもりだそうです。ケージの周りには、いわゆる普通のニワトリの親子もうろついています。「みんな放し飼いだけど、逃げないよ。みんなペットだ」と彼。

地球上にいる約1万種の鳥類のうち、唯一世界中で飼育されている鳥、ニワトリ。その飼育は数千年前に複数の地域で始まったと考えられています。しかし、なぜ人々がセキショクヤケイを飼育し始めたのかは、まだよく分かっていません。短期間ペットとして飼育した後に放すことを繰り返すうち、セキショクヤケイはヒトに慣れ、そしてヒトはセキショクヤケイの卵や肉の有用性に気づいていく…そんなニワトリ飼育の始まりを妄想させてくれる調査でした。

江田真毅

(研究部講師/動物考古学)



ケージの「中」のセキショクヤケイとそれを抱く筆者(撮影:澤浦亮平氏)

客員教員紹介

◎秦 克章 博士



秦博士と寄贈標本

2013年10月24日～2014年2月19日の期間で、中華人民共和国から秦 克章(Ke, Zhang-Qin)氏を客員教授として招へいしました。秦博士は平成9年3月に北大理学部で学位を取得され、現在は北京の中国科学院地質地球物理研究所固体鉱物資源部門の研究教授として、国内はもとより国際的にも活発に活躍しておられる著名な研究者です。専門は鉱床学・探査地質学ですが、特に斑岩型(ポーフリー)鉱床研究が中心で、チベット・モンゴル等が主な研究フィールドです。



研究室にて

本招聘期間中の研究テーマとして「中国の主要金属鉱床区における斑岩型銅—モリブデン鉱床の総括」を掲げ、滞在期間中には関係

花崗岩類の岩石学的特性や鉱化作用の生成条件と成因等に関する論文2編を投稿、さらに1編を松枝と共著で執筆という精力的な研究活動を展開されました。また、積極的に学内外の関係研究者等との研究交流を実施し、来日直後の10月26日に開催された国際シンポジウム(参加国:中国、ロシア、インドネシア、日本)では特別講演も行いました。帰国時には自国から持参された国内外の各種関係鉱石・母岩や鉱物標本類(計61点)を当館へご寄贈いただきました。

松枝大治

(資料部研究員/鉱床学・鉱物学)

◎何 宣慶 博士



ワカサギ釣りを楽しむ何博士

2013年10月7日から2014年1月31日までの約4ヶ月間、台湾国立海洋生物博物館の研究員である何 宣慶(Ho, Hsuan-Ching)氏を招へいしました。何博士はアンコウ目魚類の分類学が専門で、台湾の魚類についても分類学的研究を行っており、当館ではトラギス科とアンコウ目魚類についての研究を行いました。滞在中に得られた成果の一部は論文として共同で執筆中です。また、函館キャンパスにて、12月24日に「台湾国立海洋生物博物館での研究」、1月28日には「トラギス科魚類の分類学的研究」について講演し、大変好評でした。

何博士は冬の函館生活も満喫しました。特に彼の人生で初めてだったスキーでは、3kmほどのコースを3時間かけて滑走し、「論文を書く方がよっぽど楽だ」という感想が印象的でした。また、ワサビをととても気に入ったようで、大量のワサビに少し醤油を垂らし頬張っていました。

河合敏郎

(研究部助教/魚類分類学)

◎Vadim Bakalin 博士



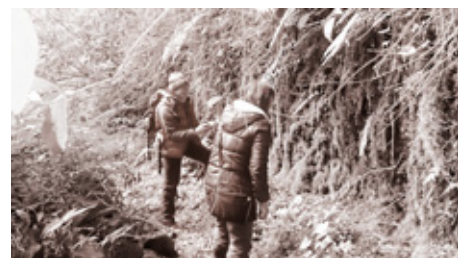
フィールド調査中のバカリン博士

ロシア科学アカデミー極東支部のウラジオストックにある植物園・研究所に所属するコケ学者、ワディム・バカリン(Vadim Bakalin)氏を2014年1月1日から3月31日までの期間で招へいしました。

これまで当館の植物部門では、特に日ロの研究交流・共同研究に力を入れ、創立以来15年の間に、ウラジオストック、ユジノサハリンスク、サンクトペテルブルグなどの各都市から総計5名の植物研究者を招聘しました。しかし、これまで当館で独自に行ってきた外国人客員制度が2013年度で終了となったため、バカリン氏がこの制度での最後の客員教員ということになりました。バカリン氏は極東のタイ類(コケ植物の中の1群)分類学の専門家、今回は科学アカデミー・北大間にとどまらず、日本における日ロのコケ植物共同研究を促進させるという目的もありました。滞在期間中は精力的に研究交流を進め、宮崎の服部植物学研究所、広島大学、京都大学、千葉県立博物館、国立科学博物館への標本調査・共同研究者とのフィールド調査を行いました。

高橋英樹

(研究部教授/植物体系学)



フィールド調査の様子

公開シンポジウム

「絶滅動物化石の最新研究 in 2014」

●2014年1月12日・2月26日



このシンポジウムは、本学で活発に行われている脊椎動物化石の研究を紹介するためにスタートし、2012年に第1回目が開催されました。そして、2014年に第2回目を企画しましたが、講演者が多く、1月12日と2月26日の2回にわたることとなりました。

1月は、爬虫類化石・恐竜・鳥化石についての講演がありました。古井空さん(理学院修士課程)は、北海道から発見された中生代の海に棲んでいたワニについて解説しました。飯島正也さん(理学院博士課程)は日本から発見されている新生代の吻部の長いワニの考察を行いました。北大出身の田中康平さん(カルガリー大学)からは恐竜の繁殖戦略について、高崎竜司さん(理学院修士課程)からはニッポノサウルスの最新研究について紹介されました。最後に、当館ボランティアでもある中野系さん(研究生)が始祖鳥の研究について解説し、筆者も恐竜の戦略についてとアラスカでの最新研究の話をしました。

2月は、越前谷宏紀さん(資料部研究員)による化石の3次元データ構築という最新研究を皮切りに、様々な化石についての講演がありました。モンゴルから発見された糞石を材料に、園部英俊さん(理学院修士課程)がその化石から推測される生態環境の復元について紹介しました。吉田純輝さん(理学部)がアメリカの巨大恐竜について、筆者は北海道から発見された恐竜について話をしました。田中公教さん(理学院修士課程)からは中生代の北海道に棲んでいたヘスペロルニス類という鳥について解説があり、北大出身の千葉謙太郎さん(トロント大学)には、恐竜と鳥類の骨の微細構造の話をしてもらいました。そして、ニュージランドのオタゴ大学からのゲスト、Cheng-Hsiu-Tsaiさんにヒゲクジラについて、田中嘉

寛さん(北大出身)にはカワイルカ科についての話をいただきました。

多くの動物を題材にした講演が聞ける充実したシンポジウムでした。参加者は、これまで知られていなかった新情報や新発見の解説に熱心に耳を傾け、講演後、演者と積極的に質問を交わし、情報交換していました。2016年に3回目の開催を予定していますので、興味のある方は是非ご参加いただきたいと思います。

小林快次

(研究部准教授/古生物学)

研究報告会

●2014年3月3日



3月3日(月)に2013年度の研究報告会を「知の交流コーナー」で開催しました。館長の挨拶の後、研究部、GCOE、CISE ネットワーク、ミュージアムマイスターの活動報告が行われ、小林准教授からは穂別で発掘中の恐竜化石についての最新の研究成果が報告されました。資料部研究員からの報告はありませんでしたが、ボランティアからは活発な活動報告がなされました。また5年間継続のボランティア活動を行っていただいた11名の皆さまの中から、3名にご出席いただき、館長より表彰がなされました。

プログラムは以下の通りです。

- 1 開会の挨拶 津曲敏郎 館長
- 2 研究部報告 大原昌宏 研究部長
- 3 GCOE 報告 木山克彦
- 4 CISE 報告 菊田融 CISE 事務局
- 5 ミュージアムマイスター報告 西本結美
- 6 穂別恐竜化石発掘報告 小林快次
- 7 ボランティア活動報告

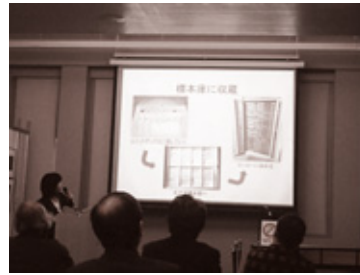
7-0 ボランティア 表彰式

7-1 昆虫ボランティア活動報告 志津木真理子

7-2 植物ボランティア活動報告 高橋英樹

7-3 考古ボランティア活動報告 西本結美

7-4 地学ボランティア活動報告 三嶋 渉



大原昌宏

(研究部教授/昆虫学)

日本ミュージアム・マネジメント学会賞を湯浅准教授が受賞

博物館教育・メディア研究系の湯浅万紀子准教授が、2014年5月に、日本ミュージアム・マネジメント学会の第15回学会賞を受賞しました。受賞理由として、「ミュージアム・マネジメントに係る研究に邁進してきた。継続的な取り組みとともに、研究における先進的な視点や学術性の高さが、学会のみならずミュージアム・マネジメント研究の進展に大きく貢献するものとして高く評価された」などが挙げられました。

湯浅准教授は、「記憶のなかの博物館」を研究テーマに設定し、博物館における体験が人々に与えるインパクトを長期的に評価する研究に取り組んでいます。人々の記憶に残る博物館体験を調査し、認知面での学習効果にとどまらない体験の多様な意味を明らかにすると同時に、その記憶を続く世代へとつなぐための博物館活動の展開方法を研究しています。博物館活動の意義を検証し、博物館資源を生かした活動への提案を導くための研究でもあります。認知心理学者の清水寛之教授(神戸学院大学)と、博物館教育学と科学教育の研究のディビッド・アンダーソン教授(プリティッシュ・コロンビア大学)と共に、日本とカナダからそれぞれ科学研究費の助成を受け、共同研究を展開しています。

湯浅准教授は「受賞を励みとし、これからもさまざまな博物館・科学館と関係者の皆様にご協力いただいて実証的な研究を進め、北大総合博物館での教育・研究に尽力していきたい」と述べています。

2013年度後期

ミュージアムマイスター認定式

●2014年4月30日



認定式後の記念撮影(左から木野さん、津曲館長、久保田さん)

総合博物館では2009年度より「ミュージアムマイスター認定コース」を設置し、本学が目指す全人教育の一環を担う教育プログラムを展開しています。ミュージアムマイスターの認定条件は、認定科目の修得、GPAが認定基準以上であること、そしてプレゼンテーションを含む面接に合格することです。

2013年度後期にこの認定条件を満たし、理学部4年の木野瑞萌さんと久保田彩さんが新たなミュージアムマイスターに認定されました。2014年4月30日に行われた認定式で、木野さんは「自分の専門とする科学の分野だけではなく、それ以外の分野についても幅広く展示解説ができるようにしたい」、久保田さんは「1年生の頃から色々なことを学べたので、それを活かしてミュージアムマイスターとしてできることを探していきたい」とそれぞれの抱負を述べました。2人とも理学院に進学し、研究を進めています。認定式に参加した水産学部2年の岩崎峻さんは、「卒論ポスター発表会の運営を担当した際に、発表する二人の取り組みを見て刺激を受けた。自分もマイスターを目指したい」と述べました。

「ミュージアムマイスター認定コース」の概要、プロジェクトについては総合博物館Webサイトでも紹介しておりますのでご覧下さい。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/education/index.html>

西本結美

(研究支援推進員)

第6回 卒論ポスター発表会

●2014年3月2日・3日

本学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館で来場者に分かりやすく説明して質疑応答する「第6回 卒論ポスター発表会」を3月2日・3日に開催しました。この取り組みは、本学の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスターコースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。今年度は文学部、理学部、農学部、工学部の4年生10名が発表しました。

発表者は、1枚のポスターを完成させるまで博物館担当教員らの指導を受け、意見交換し、改訂を繰り返し、そしてさまざまな来場者を想定したリハーサルを重ねて準備しました。発表会の2日間、練習とは違う場面に苦労しながらも、来場者に研究内容を説明し、生き生きと対話しました。教職員と市民から成る審査員10名の投票による3種類の賞と来場者の投票による来館者賞が津曲敏郎館長から授与され、審査員からの講評会が行われました。受賞者は次の通りです。

◎最優秀賞

久保田彩(理学部)

「蝦夷層群最下部の
コハク濃集を伴うイベント堆積物」

◎優秀デザイン賞(同数票2名)

荻野由香(農学部)

「ホウ酸輸送体BOR1のエンドサイトーシスによる分解制御メカニズムの解明」

山本大貴(理学部)

「原始惑星系円盤におけるアモルファス
フォスファイト粒子表面での含水鉱物形成」

◎優秀コミュニケーション賞

豊田あかり(理学部)

「古代DNA分析による
絶滅種ニホンアシカの分子系統」

◎来館者賞

高野詩織(文学部人文科学科)

「ギョスターヴ・クールへの狩猟画に関する考察」

発表会の運営もミュージアムマイスターコースの社会体験型科目と位置づけ、水産学部1年生2名と2年生1名、理学部3年生1名が、ポスターとプログラム冊子の制作、会場設営、当



来場者に説明する4年生

日の受付、プレゼンタイムと表彰式・講評会の司会進行などを担当しました。雲中慧君を中心に制作された当館の外壁タイルをモチーフにした一連の印刷物は多くの方からご好評いただきました。会場には北大カフェプロジェクトによるカフェが開設され、和やかな対話を楽しむ場が生まれました。

来場された方々には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他の学部・研究室の学生の研究を知ったり、グループで企画をトータルに運営したことで、大学博物館という場で貴重な経験を積んだことが綴られています。

湯浅万紀子

(研究部准教授/博物館教育学)



ポスター制作など運営を担当した学生達



表彰式

新緑と銀世界の季節に行う授業 — 映像制作



作品をウェルカムモニターで上映し、講評する

近年、映像に触れる機会は多くなりましたが、映像制作を学ぶ機会は本当に少ないのが実情です。そこで、映像がどのようにして作られるのか、それを知るために博物館をテーマとした映像制作の授業を開講しています。2013年度は「映像表現 夏の陣／博物館における映像表現」(大学院共通授業科目／理学院専門科目)と「映像表現 冬の陣／映像制作とスノーボード」(大学院共通授業科目／理学院専門科目)という2つの集中講義を開講しました。

夏の陣では、事前に映像を制作するための企画立案方法を事前に学び、1人1作品の映像作品制作に取り組みました。各自が持つデジタルカメラやビデオカメラを使用し、学内の端末に入っているフリーの映像編集ソフトを用いて編集を行いました。パソコンや映像編集ソフトを独自に持ち込んだ学生もいます。中間発表を経て完成した作品は正面玄関内のウェルカムモニターで上映し、互いに評価を行いました。評価には京都大学総合博物館の山下俊介先生にも加わっていただき、学生の作

品1つ1つにコメントをいただきました。これらの作品はウェルカムモニターで11月末まで上映すると同時に、当館HPのミュージアムメディアラボ(<http://www.museum.hokudai.ac.jp/medialabo/>)から動画配信しています。

冬の陣では映像制作とスノーボードを組み合わせたユニークな授業を行いました。中央ロウンをフィールドに見立て、厳しい雪上環境の中でどのように撮影を行えば良いかを学びました。映像制作者は、晴天、雨、雪、暑さ、寒さなど、どのような環境にも対応する必要があります。機材の取り扱いや撮影方法も環境に合わせて対応していかなければなりません。雪上での移動を伴う撮影には転倒の危険も伴います。転倒を前提としたスノーボードを敢えて用い、どのようにカメラを携帯して撮影すべきか実践的に学ぶことも授業の目的でした。撮影した映像は附属図書館のリテラシールームで編集し、上映、講評を行いました。

藤田良治

(研究部助教／博物館映像学)



スノーボードと映像制作を受講した大学院生たち

2013年度ボランティア講座 & 交流会

5回シリーズ博物館学講座

2013年度のボランティア講座 & 交流会は、社会における博物館の役割について改めて考える機会となるよう5回シリーズの博物館学講座として位置づけ、湯浅万紀子准教授が担当しました。博物館の定義や歴史を紹介し、博物館運営に関する近年の動向を解説した第1回以降、自然史系博物館、理工系博物館、企業博物館、エコミュージアム、水族館、大学博物館など各種博物館をケース・スタディしながら、特にコミュニケーションの場としての博物館の役割について考察を深めていただきました。



第5回講座

また、最終回には、参加者にそれぞれのお宝とそれにまつわるエピソードを紹介していただきました。子どもの頃に入手した切手が貴重なチェコのものであると分かったことをお話し

ていただいたり、ロシアと日本の国境線に置かれた礎の石膏レプリカ、室蘭に一日だけ停泊したキティホークで購入したマグカップやピアカップ、精巧に作られた竹とんぼ、希少なキイロカラガイ、新幹線から撮影された見事な富士山の写真、博物館・美術館の美しいチラシ、自身で制作した縄文土器のレプリカなどさまざまな品をご披露いただきました。エピソードと共に披露されるとお宝の魅力が増すようで、そこから展示解説のヒントを見出した方もいました。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)

サイエンスパーク in 北海道大学総合博物館

●2013年12月7日



鈴木章名誉教授から直接実験の指導を受ける小学生

2013年12月7日に、鈴木章名誉教授と高橋はるみ北海道知事をお迎えして、子ども達に科学への関心を深めてもらうイベント「サイエンスパーク in 北海道大学総合博物館」(主催：北海道、北海道大学総合博物館)を開催しました。参加したのは、札幌市と旭川市の小学校5、6年生と保護者30組です。会場は、鈴木先生の学生時代にも授業に使われていた総合博物館3階の階段教室でした。主催者を代表して高橋知事と川端和重本学副学長からご挨拶をいただいた後、鈴木先生から「科学への関心を広げるこのイベントを楽しんでほしい」とお言葉をいただきました。

参加児童は、山本靖典工学研究院准教授の指導のもと、隣に座った保護者が見守るなか各自でクロスカップリングの実験を行いました。鈴木先生や高橋知事、川端副学長、山本准教授が児童の席をまわり、鈴木先生は試薬の攪拌方法などをアドバイスなさいました。司会進行を務めたミュージアムマイスターの太田菜央さん(環境科学院修士2年)と長田詩織さ

ん(理学院修士2年)も児童に声をかけて、実験を手伝いました。

鈴木先生への質問タイムでは、ホモカップリングとクロスカップリングの違い、葉をつくる際の残留物の程度とその除去方法など専門的な質問や、中学時代に得意だった科目などいくつもの質問が寄せられ、先生は一つ一つ丁寧に答えて下さいました。鈴木先生は「資源の乏しい日本が世界に貢献するためにも理科や化学は重要であり、そして大変面白いものである」「化学も経済も工学も文学も大事であり、そのなかから科学にも興味を持ってほしい、今回の参加者から科学の道に進む人が出てほしい」と語られました。

最後に、参加児童は鈴木先生と高橋知事、川端副学長、山本准教授を囲んで記念撮影を行い、鈴木先生からひとりひとりに修了証書が手渡されました。

サイエンスパーク終了後、司会進行を務めたミュージアムマイスターの太田さんと長田さんは、児童と保護者の方々に対象に、館内のノーベル賞受賞記念展の解説を行いました。参加児童にとって鈴木先生と過ごした時間はよい思い出になったことと思います。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)



鈴木章名誉教授を囲んで

2013年度道新ぶんぶんクラブ共催講座

「エルムの杜の宝もの」



札幌農学校第2農場見学会(写真：道新ぶんぶんクラブ提供)

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、当館を初めて訪れる方も多く、講座を通して当館を知っていただくよい機会になっています。2013年度は、構内の遺跡散策や札幌農学校第2農場見学会、昆虫観察、企画展の特別講座、当館で活動する北大ミュージアムクラブMouseionの学生による展示解説を実施し、ご好評をいただきました。毎回、ボランティアの方々にもご協力いただき、運営しました。

第1回「キャンパスの遺跡散策」(江田真毅講師／動物考古学)、第2回「北海道酪農の

源流を学ぶ——札幌農学校第2農場見学会(近藤誠司 北方生物圏フィールド科学センター長／畜体系学、高井宗宏 資料部研究員／農業機械学)、第3回「花と昆虫を巡る身近な冒険」(稲荷尚記資料部研究員／生態学)、第4回「ワニと恐竜の共進化——2億3千万年を共にした動物たち」(小林快次准教授／古脊椎動物学)、第5回「北大総合博物館探訪——学生による展示解説ツアー」(湯浅万紀子准教授／博物館教育学)。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)

宇宙の4Dシアター公演

宇宙の4Dシアターボランティアでは、クリスマス直前の2013年12月23日と入学式直前の2014年4月5日にそれぞれ2回の公演を実施しました。

12月23日の第1公演の題目は看板プログラムとなりつつある「星空の立体感」。普段、私たちが眺めている星座を地球から離れて眺めてみるという当シアターならではの試みに酔いしれて戴けたと思います。12月23日の第2公演の題目は「僕の生まれた場所 ～星と命の物語～」。こちらも以前から実施しているプログラムですが、今回は、サブモニターに数百枚の写真を投影する構成にアレンジしました。アンケート結果によると、両公演とも、全てのご来場者に満足戴けたようです。

4月5日の公演は、新入生やその親族の方々を対象として2回実施しました。大学の研究を垣間見て戴くことを主眼におきましたので、比較的難易度の高い新プログラム「宇宙に漂う鉱物たち ～ガスと粒子の物語～」となりました。この公演は、3月に宇宙に関する研究で学士を取得したメンバーによる自作自演公演であり、大学の研究現場の雰囲気を感じて戴けたと思います。アンケート結果においても、難しいところが面白いというご感想をたくさん戴きました。

このように、当ボランティアでは時季や大学行事に合わせたユニークな公演を行っております。興味をお持ちの方、一緒に宇宙を旅してみませんか？

山本順司
(研究部准教授/地球科学)



ポプラチェンバロコンサート

1F「知の交流」コーナーでのボランティアによるポプラチェンバロ演奏は毎週木曜日と毎月第2・第4水曜日に行われ、多くの来館者からご好評をいただいています。企画コンサートも定期的に開催しており、10月6日(日)にミュージアムコンサート、11月4日(月・振休)には「秋の古楽コンサート」、11月17日(日)には「バロック

室内楽の楽しみ」、12月15日(日)は「小さなコンサート」、12月22日(日)は「ポプラチェンバロとア・カペラで綴るクリスマスキャロル」と題し、ボランティアの皆さんとゲストが演奏を行いました。毎回、会場から溢れるほどのご参加をいただき、バロック音楽や現代曲などの多彩なプログラムをお楽しみいただいています。

北大ミュージアムクラブ
Mouseionによる展示解説

2014年2月15日、3月1日・2日・29日・30日の5日間、「北大ミュージアムクラブMouseion」が展示解説を行いました。Mouseionは、総合博物館から支援を受け博物館を舞台とした活動を展開しているサークルで、2011年度に大学院生向けの講義の中から誕生し、2014年度に設立4年目を迎えました。1年生が展示解説にチャレンジする取り組みは、北海道大学が学生生活をより充実させる学生自主企画を支援する「北大元気プロジェクト」に3年連続して採択されています。

2月3月の5日間では、今回が展示解説デビューとなった1年生3名と、現在函館キャンパスで学んでいる水産学部3年生1名が以下の解説テーマで展示解説を担当しました。

『未来を担う新たな燃料～バイオマス燃料～』(水産学部1年・岩崎峻)
『海底の世界』(水産学部1年・江口剛)
『牛』(教育学部1年・井宮汀士郎)
『魚類の進化と不思議な形態』(水産学部3年・中原隆史)

メンバーは専門教員による指導を受け、原稿内容を何度も推敲したり、ビデオカメラを用いてお互いの立ち振る舞いをチェックしたりするなどの過程を経て展示解説デビューします。また、スケッチブックやiPad、フィギュアといった小道具を活用したり、バックヤードや大学での自らの体験を踏まえたエピソードを盛り込んだりと、独自の解説ができるよう準備を進めました。当日は多くの来館者の方々にご参加いた



多くの来館者に丁寧に解説する

だき、最多で20人強の方に展示解説を聴いていただくことができました。終了後のアンケートでは「全然詳しくない分野だったが、分かりやすい解説で面白かった」「北大生に直接解説してもらえるのがよかった」とご好評をいただくことができました。

Mouseionは現在、6月の大学祭での解説に向けて準備を進めています。今後は展示解説の能力をさらに向上させていくことはもちろん、展示解説だけにこだわらない活動展開を進めて参りたいと考えています。

雲中 慧
(水産学部2年)



iPadを使用してエピソードをまじえたオリジナルティある解説を目指す

耐震改修工事ともなう休館のお知らせ

総合博物館は1999年に設置された学内では比較的新しい部局ですが、その施設は1929年に、当時の當繕課長、萩原正氏の設計により建てられた理学部本館を使用しています。見た目が厚厚なだけでなく大変堅牢な建物ですが、建築より85年が経過し、社会情勢の変容のなか、現代の耐震基準を満たさない箇所が多く見られるようになってきました。そこで、この秋より展示室の一部を閉鎖し、2カ年にわたる耐震改修工事を実施することとなりました。2015年4月からは全面的に休館し、2016年7月ごろのリニューアル・オープンを目指します。皆さまには多大なご迷惑をお掛けしますが、新しく生まれ変わる博物館のため、よろしくご理解ご協力くださいますようお願いいたします。

平成25年度 後期記録

平成25年10月から平成26年3月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー
「昆虫のSEM写真から読み取る
バイオメティクス」
野村 周平 (国立科学博物館研究員)
日時:10月5日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「木質バイオマスの総合利用と
その今日的意義」
幸田 圭一 (大学院農学研究院 講師)
日時:10月12日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

GCOE土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「秋豊が残したもの:
ユーラシアを駆けぬけた政治学者のメッセージ」
伊藤 庄一 (日本エネルギー経済研究所)
日時:10月19日(土) 13:30～15:00
参加者:80名

バイオメティクス市民セミナー
「リンクル(しわ)とバイオメティクス」
大園 拓哉
(産業技術総合研究所 ナノシステム研究部門)
日時:11月2日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

「白夜の北極・グリーンランド展」関連セミナー
「水の大地グリーンランド ー北極最大の
氷のかたまりに何が起きているのかー」
杉山 慎 (低温科学研究所 講師)
日時:11月3日(日) 13:30～15:00
参加者:50名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「男らしさの神話と実話」
瀬名波 栄潤 (大学院文学研究科 教授)
日時:11月9日(土) 13:30～15:00
参加者:50名

「白夜の北極・グリーンランド展」関連セミナー
「テレビ記者が見た“グリーンランドの今”」
金子 陽 (HTB報道部 記者)
日時:11月10日(日) 13:30～15:00
参加者:40名

GCOE土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「北緯50度線と3人の旅人:
明治大正期の樺太日露国境点描」
「冷戦の深化と「国境の顕現」:
与那国・東アジア・東南アジア」
井潤 裕・平山 陽洋 (GCOE研究員)
日時:11月16日(土) 13:30～15:00
参加者:50名

「白夜の北極・グリーンランド展」関連セミナー
「楽園! 大地が果てる島グリーンランド
ー南極と北極、テントで暮らした二つの極地ー」
阿部 幹男 (写真家)
日時:11月24日(日) 13:30～15:30
参加者:50名

バイオメティクス市民セミナー
「バイオメティクスの産業応用
ー世界動向と国際標準化ー」
平坂 雅男 (帝人(株)知的財産部)
日時:12月7日(土) 13:30～15:00
参加者:30名

北大総合博物館土曜市民セミナー
「食快感の解剖学
ーどのようにして食べ物を認識しているのかー」
岩永 敏彦 (大学院医学研究科 教授)
日時:12月14日(土) 13:30～15:30
参加者:60名

GCOE土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「契丹の北西辺防管見:鎮州城址の調査」
「境界と利益:
旧ソ連諸国における天然ガス貿易の裏側」
木山 克彦 (スラブ研究センター 助教)
藤森 信吉 (GCOE研究員)
日時:12月21日(土) 13:30～15:30
参加者:20名

バイオメティクス市民セミナー
「バイオメティクスだけじゃない!!
博物館の活用法
ー開かれた博物館をめざしてー」
出利葉 浩司 (北海道開拓記念館 学芸副館長)
日時:1月5日(土) 13:30～15:00
参加者:50名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「フカシギの数え方 ー身近な問題に現れる
組合せ爆発と超巨大数の世界ー」
湊 真一 (大学院情報科学研究科 教授)
日時:1月11日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

公開シンポジウム
「絶滅動物化石の最新研究 in 2014 Part 1」
田中 康平 (カルガリー大学)
飯島 正也 (大学院理学院博士課程)
高崎 竜司 (大学院理学院修士課程)
中野 系 (研究生)
日時:1月12日(日) 13:00～16:00
参加者:65名

企画展示「ツイン・タイム・トラベル」関連セミナー
「イザベラ・バードの旅と写真 ー史上屈指の
女性旅行家とその旅を科学する愉しみー」
金坂 清則 (京大大学名誉教授)
日時:1月25日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

バイオメティクス市民セミナー
「生物の不思議を工学に生かす
ーバイオTRIZという考え方ー」
山内 健 (新潟大学大学院自然科学研究科 教授)
日時:2月1日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「有珠火山の植生と土壌の回復」
春木 雅寛 (資料部研究員)
日時:2月8日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

公開シンポジウム
「絶滅動物化石の最新研究 in 2014 Part 2」
千葉 謙太郎 (トロント大学)
Cheng-Hsiu-Tsai (オタゴ大学)
田中 嘉寛 (オタゴ大学)
園部 英俊 (理学院修士課程)
田中 公教 (理学院修士課程)
吉田 純輝 (理学部)
越前谷 宏紀 (資料部研究員)
小林 快次 (研究部准教授)
日時:2月16日(日) 13:00～16:00
参加者:70名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「海の巨大な渦が生態系を変える
ーおもしろ丸観測で分かったことー」
上野 洋路 (大学院水産科学研究科 助教)
日時:3月8日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

バイオメティクス市民セミナー
「シジミチョウ その騙しのテクニック」
北條 賢 (神戸大学大学院理学研究科 特命助教)
日時:3月9日(日) 13:30～15:00
参加者:60名

北大総合博物館セミナー
「極東のコケ植物 ー研究紹介ー」
Vadim Bakalin [ワディム バカリン]
(客員教授 ロシア科学アカデミー極東支部)
日時:3月29日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

平成25年10月から平成26年3月までに
行われたパラタクソミスト養成講座

野外採集・地質見学会
松枝 大治
日時:10月12日(土)～13日(日) 定員:20名
対象:中学生以上・一般(参加者33名)

鉱物パラタクソミスト養成講座(初級) in 石狩
松枝 大治
日時:10月19日(土) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者10名)

木製品パラタクソミスト養成講座(上級)
守屋 豊人
日時:10月19日(土)～26日(土) 定員:15名
対象:中級・初級修了者(参加者10名)

鉱物パラタクソミスト(初級)
三浦 裕行
日時:10月20日(日) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者11名)

海藻パラタクソミスト養成講座(初級)
阿部 剛史
日時:11月2日(土) 定員:10名
対象:小学5年生以上・一般(参加者10名)

鉱床パラタクソミスト養成講座(中級)
松枝 大治・鳥本 淳司
日時:11月9日(土)～10日(日) 定員:6名
対象:初級を終了した高校生以上
(参加者2名)

鉱石・隕石パラタクソミスト養成講座(初級)
in 小樽
松枝 大治
日時:11月16日(土) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者11名)

鉱床パラタクソミスト養成講座(上級)
松枝 大治
日時:12月7日(土)～8日(日) 定員:4名
対象:中級を終了した高校生以上
(参加者3名)

昆虫パラタクソミスト養成講座(初級)
in 小樽
大原 昌宏・福荷 尚記
日時:12月14日(土)～15日(日) 定員:12名
対象:中学生以上・一般(参加者6名)

化石パラタクソミスト養成講座(初級)
小林 快次
日時:1月11日(土) 定員:12名
対象:小学生以上・一般(参加者14名)

岩石パラタクソミスト養成講座(上級)
在田 一則・鳥本 淳司
日時:1月25日(土)～26日(日) 定員:5名
対象:中級修了者(参加者6名)

植物用語パラタクソミスト養成講座(初級)
in 札幌市博物館活動センター
山崎 真実
日時:2月15日(土) 定員:10名
対象:高校生以上・一般(参加者3名)

魚類パラタクソミスト養成講座(初級)
in 水産科学館
講師:河合 俊郎・矢部 衛・富田 武照
日時:3月19日(水)～20日(木) 定員:6名
対象:中学生以上・一般(参加者4名)

平成25年10月から平成26年3月までの
主な出来事

10月6日	ミュージアムコンサート 開催	12月15日	ミュージアムコンサート「ポブラチェンパロ 小さな演奏会」開催
10月7日	特任准教授・何 宣慶 先生 着任 (～ 1/31)	12月22日	ミュージアムコンサート「ポブラチェンパロとア・カペラで綴るクリスマスキャロル」開催
10月11日	タイ・カサセト大学工学部長一行 (4名) 解説	12月23日	宇宙の4Dシアター 開催
10月24日	特任教授・秦 克章 先生 着任 (～ 2/19)	1月1日	特任准教授・Vadim Bakalin 先生 着任(～ 3/31)
10月30日	スウェーデン・ウメオ大学副学長 一行(2名) 解説	1月26日	企画展示「ツイン・タイム・トラベル」 ギャラリートツアー 開催
11月1日	サステナビリティ・ウィーク2013行事 「白夜の北極・グリーンランド展」 開催(～ 11/24)	1月31日	アメリカ・ハワイ州副知事一行(11 名) 解説
11月10日	GCOE 第10期成果展示「境界研究の 拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界の 歩み」開催(～ 12/27)	2月23日	ミュージアムコンサート「春を呼ぶ 古楽コンサート」開催
11月26日	特別企画展示「タイからワニがや ってきた!」開催(～ 12/27)	3月5日	中国・北京科技大学長一行(17 名) 解説
1月25日	企画展示「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界 写真 展」開催(～ 5/11)	3月6日	在日アメリカ大使館公使一行(4 名) 解説
11月4日	ポブラチェンパロ 秋の古楽コンサ ート 開催	3月19日	タイ・チュラロンコン大学訪問団 (18名) 解説
11月17日	ポブラチェンパロ・コンサート「パロ ック室内楽の楽しみ」開催	3月31日	研究支援推進員・草嶋乃美さん 退職

入館者数(平成25年10月～平成26年3月)

入館者数	見学の 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	14,406	29	4 GCOE「境界研究—日本のバイオニアたち」(～ 10/27) 「巨大ワニと恐竜の世界」(～ 10/27) 「フカンギの数え方」
11月	12,480	9	1 「白夜の北極・グリーンランド」(11/1～24) GCOE「境界研究の拠点形成: スラブ・ユーラシアと世界の歩み」(11/10～) 「タイからワニがやって来た!」(11/26～) 「フカンギの数え方」
12月	3,700	4	1 GCOE「境界研究の拠点形成: スラブ・ユーラシアと世界の歩み」(～ 12/27) 「タイからワニがやって来た!」(～ 12/27) 「フカンギの数え方」
1月	2,934	4	2 「ツイン・タイム・トラベル」(1/25～) 「フカンギの数え方」
2月	4,350	5	0 「ツイン・タイム・トラベル」 「フカンギの数え方」
3月	5,954	11	4 「ツイン・タイム・トラベル」 「フカンギの数え方」

[表紙写真]

上:チュクナ海を航行するおしよろ丸IV世 平成25年度北洋航海/下左:おしよろ丸IV世の模型/
下中央:企画展示室へ続く階段の様子 函館水産科学館/下右:おしよろ丸IV世に張られた「学船」展の横断幕

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等で協力いただきました。謹んで御礼申し上げます(平成25年10月1日～平成26年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

蝦名順子, 大澤達郎, 大竹口久美子, 大原和広, 小笠原 誠, 加藤康子, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 黒田シヅ, 黒沼美春, 佐藤広行, 鈴木順子, 須田 節, 高橋美智子, 徳原和子, 栃原行人, 成田敦史, 兵藤麻里江, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇トモ子

●菌類標本

石田多香子, 菅 妙子, 齋藤美智子, 外山知子, 丸山満枝, 三浦美恵子, 矢部敦子

●昆虫標本

青山慎一, 植田俊一, 梅田邦子, 大矢朗子, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 佐藤園男, 志津木真理子, 高橋誠一, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 古田未央, 星野航佑, 松本侑三, 丸子勝彦, 宮本昌子, 村田真樹子, 村山茂樹, 山本ひとみ

●考古学

安 翔宇, 石田有莉子, 岩波 連, 大西 凜, 岡 真由美, 鹿島さく美, 亀井和久, 神田いずみ, 木村則子, 久保田 彩, 齊藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤美恵, 瀬尾涼太, 田中公教, 長瀬のぞみ, 中野 系, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信

●地学

在田一則, 生越昭裕, 加藤典明, 加藤義典, 加藤利佳, 堺 俊樹, 酒井 実, 嶋野月江, 塚田則生, 寺坂絵里, 寺西辰郎, 野村敏則, 松尾良子, 三嶋 涉, 山崎敏晴, 山本ひとみ, ロバート・クルツ

●メディア

飯島正也, 大石琢也, 河本恵子, 佐藤美恵, 手塚麻子, 中村翠珠, 三嶋 涉

●化石

朝見寿恵, 安 翔宇, 安藤匠平, 飯島正也, 池上 森, 石崎幹男, 石橋七朗, 今井久益, 大澤千里, 岡野忠雄, 加藤利佳, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 久保孝太, 久保田彩, 栗野里香, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井実, 園部英俊, 高崎竜司, 高橋希希, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手塚麻子, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 内藤美穂子, 中島悠貴, 長瀬のぞみ, 中野系, 八丁目清之, 八丁目文枝, 林 純二, 古井空, 前田大智, 森 淑子, 八巻千晶, 山下暁子, 吉田純輝

●北大の歴史展示

石川満寿夫, 石黒弘子, 寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 飯島正也, 石田有莉子, 石橋七朗, 児玉 諭, 佐藤綾乃, 園部英俊, 高崎竜司, 武石 充, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 村上龍子

●翻訳

遠藤麻衣子, 松田祥子

●平成遠友夜学校

石川満寿夫, 伊藤ますみ, 柿本恵美, 木村則子, 齋藤美智子, 城下治子, 高山緋沙子, 竹内元信, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 村井容子, 山岸博子

●4Dシアター

金川史歩, 小松麻美, 瀬川陽子, 高平 謙, 高山緋沙子, 田中公教, 塚田則生, 日浦皓一郎, 平田栄夫, 福澄孝博, 古屋恵梨香, 牧野小枝子, 山本大貴

●ポブラチェンパロ

青木 奏, 浅川広子, 石川恵子, 石田美和, 遠藤麻衣子, 大矢朗子, 長田大夢, 小野敏史, 清水聡子, 新林俊哉, 高木和恵, 高橋友子, 谷川千佳子, 長竹 新, 中村会子, 新妻美紀, 西出佳代, 浜田宏之, 福土江里, 藤田まりこ, 堀内麻衣, 松田祥子, 雪田理菜子

●図書

伊藤ますみ, 岡西滋子, 亀井和久, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 高木和恵, 谷岡みどり, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久米進一, 謝田久恵, 星野フサ, 本名百合子, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

●第2農場

石田多香子, 石川満寿夫, 城下治子, 竹内元信, 寺西辰郎, 成田千恵子, 濱市宗一

●水産科学館

明石留奈, 渥美圭佑, 池田浩介, 石丸詩織, 岩井卓也, 大友洋平, 大橋慎平, 奥 香奈美, 金子尚史, 川内惇郎, 亢 世華, 菊地 優, 君島裕介, 工藤怜子, 櫻井慎大, 佐々木嘉子, 佐藤広崇, 島田英憲, 杉原菜月, 富田武照, 館山玲央, 田中大樹, 為近昌美, 棚野秀平, 永野優季, 中原隆史, 荻本啓介, 森田恭司, 堀 睦, 三上大樹, 百田和幸, 山中智之, 和田 茜, Chaiyapo Monruedee

●企画展示「ツイン・タイム・トラベル」

在田一則, 石田多香子, 今井久益, 岡西滋子, 今野成捷, 竹内元信, 田端邦子, 塚田則生, 寺西辰郎, 永山 修, 沼崎麻子, 濱市宗一, 星野フサ, 村上龍子, 山岸博子, 山本ひとみ, 問田高宏, 岩崎 峻, 雲中 慧, 山内彩加林